

研修主題

『自分の考えをもち、表現できる児童の育成』—主体的な交流活動を取り入れた国語科指導を通して—

内容：要請訪問代表授業・高学年ブロック代表授業について

要請訪問代表授業・高学年ブロック代表授業 6年1組 中谷 愛学級 国語『未来がよりよくあるために』

今の6年生の子どもたちは・・・

◎身近な課題について2択で考えさせると、活発に意見交換ができる。

◎友達の意見や考えを聴き、自分の考えと比較したり、共感したりすることができる。

▲話し手の意図を考えて聞くことが弱いため、「意見を聴き合って考えを深める」本単元の学習内容は、おそらく不得意である。

6年生の考える「主体的な交流活動を取り入れた授業づくりをすることで、1年後にこんな姿が見られたらいいな・・・」
自分と友達の考えの共通点や相違点に気づき、自分の考えを振り返り、
新しい発見に気づき、全体で考えを深めたり広げたりすることができる姿。

授業の視点

【見取る場面】「未来がよりよくあるために」をテーマに、それぞれの意見とその理由を聴き合い、集団で思考を深める場面。

【手立て】話し合いの進め方や質問・助言のポイントをもとに計画的に話し合い、ワークシートや付箋といったシンキングツールを用いて思考過程を可視化させる。

【児童の姿】自分の考えを広げたり深めたりできるであろう。

授業説明

① 児童の思考を促すための手立てとして参考にしたこと

(ア) 県教委からでている H30 学校教育の指針解説(国語)

(イ) はばブラp.131のシンキングツール。拡散型で多面的に見るボーン図を意識してワークシートを作成。付箋の色は、この後の意見文の構成を考えるときに使えるように、教科書の例に合わせた。

(ウ) 中部教育事務所主催の国語科指導法にて、授業の動画を見たとき、「パーフェクトな児童の発表を聴いている子たちの思考は止まっている。」と感じ、「全体で取り上げるのは、つまずいている児童のもの、それをみんなの知恵を絞って学んでいくほうがよい。」と感じた。

② 指導案検討会で、「他者の意見を聴いて、理解して話し合う活動」は難しいので2時間の設定にした。

③ 最終ゴール(目的)を意識させるため、教科書p.98、99の意見文の例は、毎回音読をした。

④ 教室掲示の「聴いて学ぼう」は、折に触れて各教科で確認をして児童にも定着している。

⑤ 自分の根拠となる資料を調べる時間には、図書室やタブレットを使い調べさせた。自然と同じ考えをもつ子供たちで集まって話し合っている姿が見られた。本時の話し合い活動は、「質問が活発にできること」「多角的な意見ができること」を目的に違うテーマで班を作った。

⑥ 2時間の話し合い活動を通して、助言や質問の付箋が増えた。付箋の数を見ると、人数を3人にしたほうがじっくり話し合いができて意見が出たのではないか(メンバーにもよるが)と感じた。

⑦ A君については、事前の学習で本人から助けてほしいと申し出があったので、人権に配慮しながら例示と差し替えて取り上げた。

やり方のロールプレイ



【つかむ・見通す】・前時の学習を振り返り、本時の学習課題を確かめる。

- 最初にロールプレイをすることで流れがわかりやすかった。
- ラミネートにした進行表が話し合いを助けた。付箋による視点の色分けが項目別で分かりやすく、導入が短時間で済んだ。

話し合いが停滞しているが思考は止まっていない



【深める】・グループで互いの意見を聴き合い、互いに質問や助言を出し合って、考えを深める。(1人目と2人目の間にA君の事例を全体で考える場面を設けた。)

- A君の例を話し合いの途中で、全体で考えたのは有効であった。途中で挟むことが子供たちの考えが深まり、やり方がわかりやすかった。
- 2時間に分けたことで一人あたり11分の話し合い活動が取れたおかげで、活動にゆとりができた。
- 付箋に書きながら話すことで考えを整理できた。

A君の例を全体で考える場面



- ▲深く調べている児童に対しての助言がしづらかった。
 - 難しい用語などの質問ができていたので「誰にでもわかりやすい意見文づくりを目指す」ための話し合いができていた。
 - 発表者自身が相談することを用意したらよいのかも。
- ▲同じテーマでグループを分ければ、知っていること同士で深い意見が出たのでは？
 - 知っていること同士で逆に質問が出ないのではないか？(比較してみるとよいだろう)

この後、話し合いが活発になった。

指導助言<<鹿児島教科指導員より>>

丁寧で細部まで練られた単元計画。教師の思いが伝わった。

「話すこと・聞くこと」の単元での資料の活用方法:

資料をはじめに使うことで、集めた資料や話し合いが意見文になっていく必要性を感じる意欲付けになる。
付箋の可視化が有効的だった:「ピンクを増やせばいいんだ。」視覚化で意欲付けになった。「とういうこと?」「これってとういうこと?」のやり取りがあり、考えが深まっていた。

指導助言<<池田指導主事より>>

何を見える化するか。どのように振り返りをいて、それをどう次につなげるか。

◎校内研修に関して

学校全体でバックアップ: 具体物をもちより、明確なゴールを目指している、プレ授業をしている。学校全体でバックアップしている様子が見られている。

◎授業について

教師の導く児童主体のめあて: 単元のゴールを明確に意識している。めあてを導くやりとりは、子ども達が考えたようで、じつは予想していた教師が導いている姿だった。

シンキングツールによる支援は意図的に減らしていく: ワークシートや付箋は、話し合いの視点が共有化できる手助けとなる。慣れれば、必要最低限の文で付箋も小さくできたり、支援がなくても済むようになるとうい。

話し合いの停滞は、考えを巡らせる必要な時間: 黙っているときも子ども達は考えている。大切なのは**意見が出る前の時間か、出た後の時間のどちらが必要か**。今回は、意見が出ないと話し合いが始まらない。

→司会のカードでクラス全員が司会を経験すると意見が出ないと困ることがわかる。

→話し合いの進め方のラミネートカードを活用。「問いかけの言葉 (NHK: Qワード)」などを示す。

※停滞するのは、観点(例: 何を話すのか)がわからない。観点(例: 話すこと)の見える化が必要。

振り返りの意義: **価値があると思えることが大切**。価値があれば次に生かそうと思える。一方、「できなかったこと」を次にできるようにするにはどうすればいいか、一緒に考えることが本来の学び。

深めるとは、深く掘り下げるのではなく、よいものにたどり着くこと

例: 青と緑の付箋でできたと思ったけど、ピンクの付箋を入れることでもっと良いものができた実感した、気づいたときが深まった瞬間。